地域商店街との連携による
新PBL型インターンシップの取り組み

須永　一道・齋藤　　智・柳澤　利之

Internship Program with a New-Type Internship Framework in Cooperation with Regional Mall

Kazumichi Sunaga, Satoshi Saito, Toshiyuki Yanagisawa

１．はじめに

現下、インターンシップはキャリア教育の中に位置づけられ、全国の大学・短期大学などで一般的に行われている。従来のインターンシップは、学生が企業・団体などにおいて設定した実習期間にての就業体験を重ね、座学では不十分な学習成果を得ようとするものであった。しかし、それでは企業側と教育側の連携によって、事前に一定の就業体験プログラムが策定されていることから、学生自身が課題を見つけ、その解決を考え、実行に移すというプロセスを経験させる要素は希薄であった。そこで一歩進んだPBL型インターンシップという形式が検討され、実際取り組み事例が散見されるようになったと思われる。

我々は、長年に亘り学生へのインターンシップや実習指導を行ってきているが、同じく従来型のインターンシップの限界を感じ、もっと踏み込んだ新しい形式のインターンシップを検討することとした。

本稿は、我々が、事前の研修プログラムを組まずに、学生たちを一定のエリアに放出し、学生自ら実習先を開拓し、その先で課題を発見・解決実行するという、いわば「飛び込み営業型」のインターンシップについて、地域商店街というエリアを設定し実施した内容について纏めたものである。このことについてここで報告する。

２．新PBL型インターンシップ実践の目的

PBL型インターンシップは、PBL（Problem Based Learning：課題解決型学習）手法を用いて、企業や地域、教職員が設定した課題や目標に対して学生がチームを作り取り組むインターンシップである。

本学では、「地域商店街空洞化問題＝ミッション（使命）」を念頭に置き、商店街において個店の店長や社員とのコミュニケーションから店舗の課題を見つけ、その課題を解決するべく活動するインターンシップを「地域ミッションインターンシップ」として実践する。

本プログラムでは体験型インターンシップを経験型インターンシップへ進化させることで、産業界から求められている「課題発見・解決力」「提案力」「コミュニケーション力」の養成を行う新PBL型イ

ンターンシップを実施し、その運営・検証を進めることでプログラムの完成に向けた取り組みの検証を目的とする。

３．調査方法

新潟青陵大学と新潟青陵大学短期大学部においては、平成25年度３月に実践した新PBL型インターンシップ（地域ミッションインターンシップ：以下 地域インターン）のプレインターンシップの成果を受け、平成25年９月に本格的に地域インターンを実施している。本年度は両校とも同様のプログラムを実施しているが、新潟青陵大学短期大学部が本年度実施している「地域ミッションインターンシップⅠ」のプログラムで完結するのに対し、新潟青陵大学におけるプログラムが「地域ミッションインーンシップⅠ」（本年度実施）と併せ、平成26年度に「地域ミッションインターンシップⅡ」の導入を予定しており、プログラム全体の完成が26年度であることから短期大学部との取り組みを単純比較できない。そのため、本報告においては新潟青陵大学短期大学部の内容に限定したものとしたい。

なお、今年度の取り組みに際し事前に実施した地域インターンは、次のような内容で実施されている。

表１　「プレインターンシップの概要」

	内　　容
実施期間	平成25年3月11日～15日
協力先	新潟市中心街協同組合
	新潟市商工会議所
実施エリア	新潟市中央区古町5番町通商店街
	新潟市中央区古町6番町通商店街
	新潟市中央区古町7番町通商店街
対象学科と参加学生数	新潟青陵大学短期大学部人間総合学科　　:8名(1年生)
	新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科:8名(1年生)

プレインターンシップの実施に向けては、協力先との会議を平成24年12月～平成25年３月まで４回開催し地元商店街での実施の可能性と問題点について検討を進めた。

表２　「プレインターンシップ検討内容」

	開催日	検討内容
第1回	2012.12.25	情報交換 ・協力団体がこれまで取り組んでいる古町地区活性化事業 地域ミッションインターンシップについて質疑 ・これまでのインターンシップとの相違点 ・実施エリア、実施時期 ・活動拠点
第2回	2013.1.25	地域の方に受け入れて頂くために インターンシップの愛称 ・地域の方から理解されやすいものが必要 学生の格好 ・一目で活動中であることが伝わるようにする 商店街の方が学生にお願いすることの例 ・「掃除」「販売のお手伝い」など 個店へのプロモーション ・説明案について検討
第3回	2013.2.22	プレインターンシップ実施案確認 ・実施目的、実施日程、実施エリア、連携先 オリエンテーションについて ・実施案の確認 報告会 ・実施案の確認
第4回	2013.3.25	学生報告会 ・学生活動状況の共有 活動内容についての意見交換 ・今後の活動について

プレインターンシップでは、本番を想定した活動を実践することを目的に行い学生自身が商店街の個店を訪問する中で課題を見つけ、その課題に対して検討→提案→実践→見直し出来るのかを確認している。

３．１　調査対象

調査内容については、平成25年９月に実施している地域インターンでの取り組み概要と実践内容を取り上げ、その後に検証を加えたものである。

表３　「25年度実施の地域ミッションインターンシップ概要」

	内　　容
実施時期	平成25年9月2日～9月20日
協力先	新潟市中心商店街協同組合
	新潟商工会議所
	新潟お笑い集団NAMARA
実施エリア	新潟市中央区古町5番町通商店街
	新潟市中央区古町6番町通商店街
	新潟市中央区古町7番町通商店街
対象学年と参加学生	新潟青陵大学短期大学部人間総合学科　1年生16名 2年生　4名

（1）実施時期

プレインターンシップとしては３月に実施を行っているが、今年度の実施では夏休み期間中である９月上旬～下旬にかけての期間を選定している。これは、次の理由による。

○人間総合学科１年生後期に講義として「インターンシップ」を実施している。

・３月に実施した場合、学生は2月下旬から連続したインターンシップへの参加となるため、明確な目標を持たせた活動と効果的な取り組みが難しいと判断。
民間企業での体験型インターンシップを５日～10日経験した直後では、自身の体験をまだ落とし込めていないため、成果を結び付けることが難しい。

○就職活動が１年生12月より説明会がスタートし、３月以降本格的な選考となる。

・落ち着き集中した効果のある取り組みとするため、夏休みを選択。
プレインターンシップ時の反省として、就職活動の時間を気にする学生がいたため、本事業に集中させるためにも、３月からの変更とした。

・１年生の夏休みに経験させることで、後期以降の講義への取り組み意識や自身のキャリアプラン作成への反映も進める。

その他として、次年度以降１年次に経験した２年生の参加も見込め、事業の継続性と広がりを見込んだ取り組みを進めることが出来る点からも夏休みを選択している。

（2）協力先

プレインターンシップ時にご協力頂いた「新潟市中心商店街協同組合」「新潟商工会議所」に加え、地元新潟で活躍している「お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ」からもご協力頂いている。「お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ」との関係スタートも「新潟商工会議所」から本学の取り組みを先方にご紹介頂いたことがきっかけである。本学の取り組みをご理解頂いているからこそであり、協力を進めていた成果でもある。各団体からそれぞれの立場からご意見を頂くことはもちろん、関係者への働き掛けを頂いたことで事業をスムーズに進めることが出来ている。

表４　「協力先団体」

協力先	内　　容
新潟市中心商店街協同組合	・商店街組合及び個店への協力依頼時の各種対応 ・実施時の連携準備
新潟商工会議所	・商店街との連携を進めるにあたり、これまでの活性化事業や今後の計画についての情報共有
お笑い集団NAMARA	・各種インフラを活用した告知活動 ・学生募集活動

（３）調査対象エリアの選定

実施エリアは、プレインターンシップと同様に新潟市中央区古町通５番町～７番町とした。新潟市中心部の歴史ある商店街であり、かつて新潟市内で「まちに行く」と言えば古町であり、誰もが心を躍らせて買い物に出かけた商店街である。また、新潟駅よりバスを利用する本学学生にとっては、大学と新潟駅とのほぼ中間に位置する商店街であり、新潟駅万代口より新潟市のシンボル万代橋を渡り２㎞弱で古町に到着する。近年は県外資本による郊外店進出や後継者問題による店舗閉店もあり客数減に悩んでいる。

図１　「古町地区概略図」

これまでも古町地区の活性化では、さまざまな事業に学生が関わっている。例えば平成21年12月に古町６番町商店街振興組合が立ち上げた「新潟セントラルエスコーターズ」として古町地区商店街を巡回しながら、店舗案内や清掃活動など数年間行っていた。

エリア選定にあたっては、いくつかの商店街（沼垂地区商店街、学校町商店街など）も候補として検討しているが、学生の移動や既存店舗数による活動条件を考え、新潟市内において商店街の活性化をミッションにするには最適なエリアと判断し選定している。

（４）学生募集　　25年６月～７月

学生募集については、平成25年度前期においてキャリア関連講義時を利用したプロモーションと休憩時間に学生ホールでの説明および勧誘活動を行っている。講義時に協力先となっている「ＮＡＭＡＲＡ」との連携によりプロモーションを行い、学生への希望アンケートを実施することで学生に取り組みイメージを持たせたうえで参加意志の確認を進めている。当初は本学人間総合学科２年生を中心に参加者募集を進めたが、就職活動時期との関連もあり参加希望者数は芳しくなく、人間総合学科１年生へシフトした募集活動を展開。最終参加者２年生４名、１年生16名の計20名となった。

（5）事前説明会　平成25年８月８日

本学講義室にて参加学生全員を対象とした事前説明会を実施。「活動目的」「活動内容」「活動場所」「注意事項」などを説明している。全体説明後は小集団を形成し、実際の取り組みについての詳細の説明と併せ参加学生のスケジュール確認を進めている。

これは、本プログラムにおいては学生の自主的参加を原則としていることから、シフト制による参加となっており、学生にとっては３週間すべての参加や週２日から３日のみの参加も可能となっているため、シフト調整についても説明した。

（6）参加学生自己評価

参加学生の成長を測定することを目的に、インターンシップ初日の９月２日と最終日である９月20日にそれぞれ「地域ミッションインターンシップ自己評価シート」を参加者に配布し実施している。（別紙　地域ミッションインターンシップ自己評価シート　参照）

調査項目は以下の16項目とし、４段階の自己評価である。

表５　「調査項目」

情報収集力	課題発見力	課題分析力	原因追究力	シナリオ構築力	計画立案力	計画実行力	検証力
傾聴力	質問力	プレゼンテーション力	会議進行力	率先力	合意形成力	協働力	やりぬく力

評価段階＝Ａ：できている、Ｂ＝ややできている、Ｃ＝あまりできていない、Ｄ＝できていない

３．２　調査実施

（1）全体像

地域インターンの全体像は「図２　地域ミッションインターンシップ活動イメージ」の通りである。

①　「お伺い　Hearing」

学生自身による課題作成である。事前に課題調整が行われているこれまでのインターンシップとは異なり、プログラムスタート時点で学生に与えられているのは「商店街の活性化」というミッションのみである。学生は商店街にある個店を訪問し、個店それぞれが抱える課題を見つけなければならない。個店には本学学生が訪問し、何かお手伝いをさせて頂くことしか伝えていないため、学生はグループとしての活動を説明し、日頃の商店では取り組めていない事項について聞きだし自分たちの活動を通して課題を発見することになる。

②　「話し合い　Discussion」

ヒアリングした内容をもとに、要望・課題解決の可能性をグループ内で検討する。

情報として持ち寄った内容全てが課題として取り組めるものとは限らない。行政や商店街全体の取り組みとして経費を伴うものや長期間を要して取り組むものまである。そこで、学生は自身が３週間という限られた中で取り組めることや実現できる課題をグループで検討し取り組み課題を決定することになる。課題が決定したら、グループで詳細を検討し提案準備を進める。

③　「行動　Action」

課題に対する解決方法を店舗に出向き提案する段階となる。この段階で取り組みが難しいと判断した課題については、個店に対して理由を伝えることが必要になる。

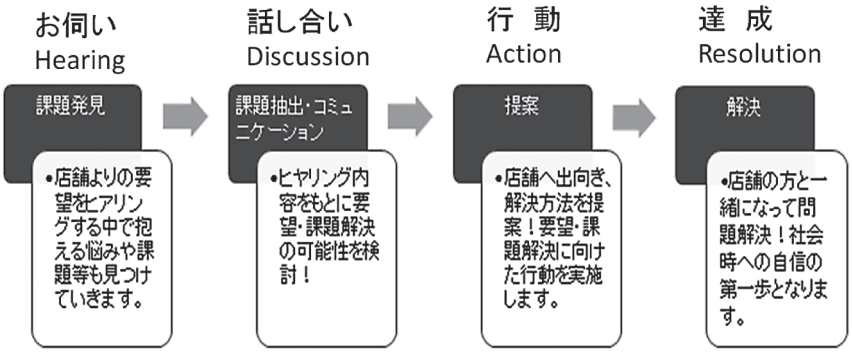
取り組める内容については、グループとしての課題解決内容と併せ個店の方に説明し、同意を得なければならない。そのため学生にとっては、プレゼンテーション能力も問われ、自身の考えを押

し付けるのではなく、わかりやすく伝えることが求められる。

④　「達成　Resolution」

学生グループとしてのみ取り組むのではなく、店舗の方々との連携により取り組みを進めなければならない。社会人としては当然の課題解決の流れではあるが、学生にとっては学内では学べない貴重な経験の機会となる。

図２　「地域ミッションインターンシップ活動イメージ」



（２）活動時のスタイル

活動時には、「勝手に役立ち隊」のロゴ入りピンクのエプロン（図３　「勝役隊エプロン」）を身につける。これは、次の２点の理由による。

①　本学の活動であることが一目でわかる。

②　商店街の方々より、いつお手伝いの要請があってもお応えする事が出来る準備を整えている。

図３　「勝役隊エプロン」

「ピンクのエプロンをしているのが、青陵の勝役隊」というイメージを定着させることで、活動のチャンスを広げることも狙っている。

（３）活動拠点学生が活動する拠点

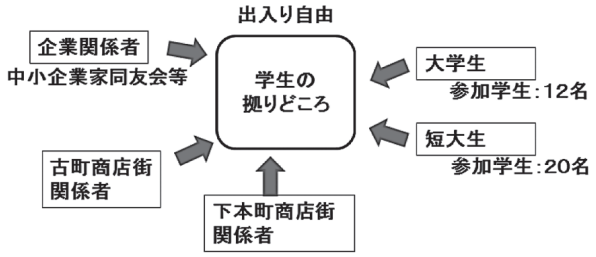
多くの大学が地元商店街での活動を進めているが、その姿が見えないという話を聞くことも増えている。事前の打ち合わせや活動開始当初は商店街で数日活動をするものの、活動期間の多くを大学内での活動となっているため、商店街の方々には学生が活動している様子が見えていないというものである。

そこで本学の活動においては、地元商店街の一角をお借りし実施エリア内に活動拠点を設け、取り組みを進めている。今回その場所をご提供頂いたのが古町七番町通にある旧大和百貨店のワンフロアである。

第一希望は商店街路面店ではあったが、旧大和という新潟市内では誰でもが知っているビルを利用することで、出入り自由な活動拠点を目指す取り組みとした。

結果として学生自信の活動拠点としては機能したが、地元商店街の方々からおいで頂くまでの機能を持たせることが出来なかったことは反省点である。これは、旧大和百貨店ということで場所はすぐにご理解頂いたが、お借りしたフロアが４階ということで、出入り自由な空間という目標まで進まなかったことは次年度活動時の検討課題である。

図４　「活動拠点イメージ」



（４）学生による自己評価

学生自身の受けとめ方や当日の精神状態などさまざまな要因により変化が大きい自己評価結果であるが、学生がどのように自身を認識したうえで本プログラムに参加し、参加後どのように変化しているかを確認するため自己評価を実施しており分析を進めたい。インターンシップ実施前後に実施した自己評価を集計したのが「表６　自己評価集計」である。

表６　「自己評価集計」

実施前	情報収集力	課題発見力	課題分析力	原因追究力	シナリオ構築力	計画立案力	計画実行力	検証力	傾聴力	質問力	プレゼンテーション力	会議進行力	率先力	合意形成力	協働力	やりぬく力
A	0%	15%	5%	10%	0%	15%	10%	5%	45%	0%	0%	5%	0%	0%	5%	20%
B	55%	70%	40%	35%	45%	35%	55%	55%	50%	50%	20%	30%	15%	45%	70%	65%
C	35%	5%	50%	40%	40%	45%	30%	40%	5%	45%	75%	60%	65%	40%	15%	15%
D	10%	10%	5%	15%	20%	5%	5%	0%	0%	5%	5%	5%	20%	15%	10%	0%
実施後	情報収集力	課題発見力	課題分析力	原因追究力	シナリオ構築力	計画立案力	計画実行力	検証力	傾聴力	質問力	プレゼンテーション力	会議進行力	率先力	合意形成力	協働力	やりぬく力
A	15%	38%	8%	15%	23%	8%	23%	23%	77%	31%	8%	8%	8%	8%	8%	69%
B	77%	46%	69%	46%	31%	62%	46%	38%	15%	62%	62%	54%	31%	62%	69%	23%
C	8%	15%	15%	38%	38%	31%	31%	38%	8%	0%	23%	31%	54%	23%	15%	8%
D	0%	0%	8%	0%	8%	0%	0%	0%	0%	8%	8%	8%	8%	8%	8%	0%
前後比較	情報収集力	課題発見力	課題分析力	原因追究力	シナリオ構築力	計画立案力	計画実行力	検証力	傾聴力	質問力	プレゼンテーション力	会議進行力	率先力	合意形成力	協働力	やりぬく力
A	15%	23%	3%	5%	23%	−7%	13%	18%	32%	31%	8%	3%	8%	8%	3%	49%
B	22%	−24%	29%	11%	−9%	27%	−9%	−17%	−35%	12%	42%	24%	16%	17%	−1%	−42%
C	−27%	10%	−35%	−2%	−2%	−14%	1%	−2%	3%	−45%	−52%	−29%	−11%	−17%	0%	−7%
D	−10%	−10%	3%	−15%	−12%	−5%	−5%	0%	0%	3%	3%	3%	−12%	−7%	−2%	0%
比較	情報収集力	課題発見力	課題分析力	原因追究力	シナリオ構築力	計画立案力	計画実行力	検証力	傾聴力	質問力	プレゼンテーション力	会議進行力	率先力	合意形成力	協働力	やりぬく力
A＋B	37%	0%	32%	17%	14%	19%	4%	2%	−3%	42%	49%	27%	23%	24%	2%	7%

【実施前】

Ａ＝できているという回答が多かったのは、「傾聴力」45％、「やりぬく力」20％、「課題発見力」・「計画立案力」15％、「原因追求力」・「計画実行力」10％であり、他の10項目は10％未満である。Ｂ＝ややできているについては、「課題発見力」・「協働力」70％、「やりぬく力」65％、「情報収集力」「計画実行力」「検証力」55％、「傾聴力」「質問力」50％と半数の項目が50％を超えている。Ｃ＝あまりできていないについては、「プレゼンテーション力」75％、「率先力」65％、「会議進行力」60％、「課題分析力」50％が50％を超え、「計画立案力」「質問力」45％、「原因追求力」「シナリオ構築力」「検証力」「合意形成力」40％と10項目が40％を超えている。

【実施後】

Ａ＝できているという回答については、実施前10％満たなかった10項目中、「シナリオ構築力」「検証力」「質問力」の３項目が新たに10％を超えるなど全16項目中15項目で伸ばしている中、「計画立案力」のみ実施前15％から実施後８％に減少している。Ｂ＝ややできているについては、16項目中7項目（「やりぬく力」-42％、「傾聴力」-35％、「課題発見力」-24％など）で減少しているが、この項目は「Ａ＝できている」で「やりぬく力」49％、「傾聴力」32％、「課題発見力」23％など大きく伸ばしている項目と合致している。Ｃ＝あまりできていないについては、「課題発見力」10％、「傾聴力」３％、「計画実行力」１％の３項目が増加し、「協働力」が増減無しであった以外の12項目は減少している。

事前事後の自己評価から、「Ａ＝できている」「Ｂ＝ややできている」の項目に絞り検証を進める。事前段階で「Ａ＋Ｂ」が80％を超えていた項目は「傾聴力」95％、「課題発見力」「やりぬく力」85％の３項目であり、事後になると事前3項目「傾聴力」「やりぬく力」92％、「課題発見力」85％に加え、「情報収集力」「質問力」92％の5項目となっている。「情報収集力」は事前より37％、「質問力」事前より42％と大きな伸びを見せての80％越えである。また、80％を超えていないが前後で大きな伸びを見せた項目としては49％伸びた「プレゼンテーション力」69％、32％伸びた「課題分析力」77％がある。

（５）外部テスト

学内における評価のみではなく、全国の大学における取り組みと評価の検証についても行えるよう外部テストの実施を試みている。初年度であるため、詳細検討は26年度以降に行う予定となっているが、外部テストの選定も含め今回「ＰＲＯＧ」テストを試行した。本テストを選択したのは、平成24年度に文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」を本学が採択しており、関越地域グループ18校と連携し、インターンシップの評価についても検討する中で、外部テストの試行として「ＰＲＯＧ」テストを選定し、実施していることによる。

（試行参加校：新潟大学、茨城大学、新潟工科大学、千葉商科大学、千葉科学大学、新潟青陵大学、新潟青陵大学短期大学部）

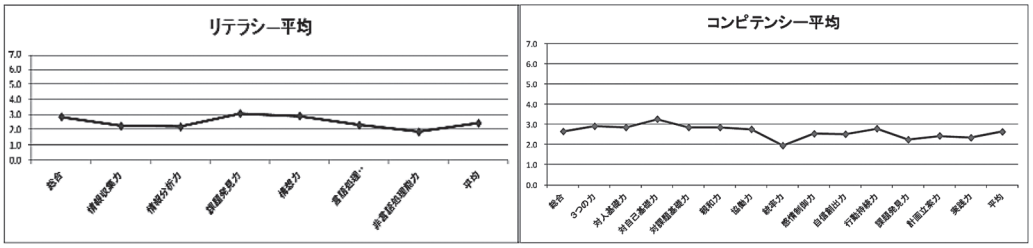
この「ＰＲＯＧ」テストは、株式会社リアセックと河合塾が共同で開発したもので、ジェネリックスキルを測定している。ジェネリックスキルとは２つのチカラから成り立っており、知識を活用して問題を解決するリテラシーと、人と自分にベストな状態をもたらそうとするコンピテンシーであると、定義されている。この２項目で測定しているのが次のチカラである。

リテラシー　　：問題解決力＝情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力
コンピテンシー：対人基礎力＝親和力、協働力、統率力
　　：対自己基礎力＝感情制御力、自信創出力、行動持続力
　　：対課題基礎力＝課題発見力、計画立案力、実践力

実施にあたっては、事前説明会実施時に学生に配布し、本インターンシップ実施初日に学生より回収している。

テスト結果は、次の通りである。

表７　「ＰＲＯＧテスト結果」



リテラシー平均については、「総合」が2.8となっている。項目別に見ると「課題発見力」3.1、「構想力」2.9、「情報収集力」・「情報分析力」2.2、であり、「言語処理能力」2.3、「非言語処理能力」1.8である。「課題発見力」3.1と「非言語処理能力」1.8を除き他の項目が「2.0台」で推移しており、大きな項目差がない状況である。

コンピテンシー平均については、「総合」が2.6となっている。３つの中項目では「対自己基礎力」3.3、「対人基礎力」・「対課題基礎力」2.8である。９つの小項目では、「親和力」・「協働力」・「行動持続力」2.8、「感情抑制力」・「自信創出力」2.5、「計画立案力」2.4、「実践力」2.3、「課題発見力」2.2、「統率力」1.9である。統率力を除き他の項目が「2.0台」で推移しており、大きな項目差がない。

ＰＲＯＧテストからわかる課題は、「統率力」への取り組み方である。統率力は本人の持っている基礎力も大きく影響すると考えている。短大２年間で能力向上を目指すべき項目としては難易度が高く、他の「実践力」「課題発見力」向上を優先したプログラムとして取り組むかについては、26年度の課題としたい。

４．終わりに

本年度の地域インターンにおいては、プログラム全体の運営検証に終始している。全体の流れは問題なく運用できることが確認できているが、細かな課題が洗い出された。特に、評価については学生の自己評価と外部テストによる評価となっており、本学独自の評価項目策定を急ぎたい。

自己評価については、インターンシップ取り組み前から「傾聴力」・「やりぬく力」・「課題発見力」は高く、事後になると「情報収集力」「質問力」も高い評価となる。これは、本プログラムでの活動を進めるためには必要な項目として想定しており、経験の中で学生への意識付けを強めたい。

また、学生が課題を発見し、実習先を決定するというプログラムの性格上、同一店舗での課題の深堀が難しく、ファーストアプローチに終始していた。次年度は、本学の取り組みが地元商店街からも理解されての活動となるため「お伺い」⇒「話し合い」⇒「行動」⇒「達成」のサイクルを同一店舗で体験させる仕組み作りが必要となる。

以上の諸点について本取り組み上の課題も浮き彫りとなった。この点を踏まえて次回の取り組みを進めていく。

地域インターン実施にあたっては、新潟中心商店街協同組合様、新潟商工会議所様、お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ様、ＰＡＮＤＡスタジオ様および学内関係者では地域連携コーディネーターとして参加頂いた西田卓司様、成田雅史様・加藤大輔様、キャリアセンター主席調査役田村瑞穂様に感謝申し上げます。

参考文献

1．学校法人河合塾　株式会社リアセック著「ＰＲＯＧの教科書」

別紙　地域ミッションインターンシップ自己評価シート

地域ミッションインターンシップ自己評価シート

次の４段階で自己評価して下さい。（A：できている　B：ややできている　C：あまりできていない　D：できていない）

項　　目	自己評価	質　　問
情報収集力		一見つまらないと思えることであっても、後に役立つ可能性を考え、情報を集めることができる
課題発見力		数ある情報を整理して、自分が特に取り組みたいテーマを決めることができる
課題分析力		一つの事象を、関係する様々な人々の視点から見ることができる
原因追究力		なぜ？という問いを繰り返し、本質の原因に迫ることができる
シナリオ構築力		課題が解決された後の社会の姿を思い描くことができる
計画立案力		課題を解決するまでの行動を、段階的に計画することができる
計画実行力		自分たちの決めた計画を、計画通りに実行することができる
検証力		状況にあわせて行動を見直しながら、計画を改善していくことができる
傾聴力		相手の気持ちや心情に共感しながら話を聞くことができる
質問力		相手の話を理解し、話を深めたり分かりやすくするような質問ができる
プレゼンテーション力		自分の考えや持っている情報を、コンパクトにまとめてわかりやすく人に伝えることができる
会議進行力		参加者全員の意見をバランスよくくみ取りながら、会議を進めることができる
率先力		皆の先に立って模範を示し、チームを誘導することができる
合意形成力		出た意見を調整し、チームの合意を形成することができる
協働力		チームの力が最大限発揮されるように、一人ひとりの果たすべき役割を分担することができる
やりぬく力		困難に直面した時にも、諦めず責任感を持って最後までやり抜くことができる